

# 「令和4年度第2回茅ヶ崎市いじめ防止対策調査会」 会議録（詳細）

議題	茅ヶ崎市におけるいじめ問題の現状及び対策について 茅ヶ崎市いじめ防止対策調査会（第4期）の調査について
日時	令和5年1月11日（水）10時～11時30分
場所	茅ヶ崎市役所本庁舎会議室3
出席者氏名	<p><b>【委員】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 柳生 和男（清和大学 非常勤講師）</li> <li>・ 小島 秀一（NPO法人ストップいじめナビ 弁護士）</li> <li>・ 朝倉 新（新泉こころのクリニック院長）</li> <li>・ 堀 恭子（聖学院大学 教授）</li> <li>・ 川村 和美（公益社団法人神奈川県社会福祉士会）</li> <li>・ 瀧本 康二（中央児童相談所）</li> <li>・ 木村 理江（茅ヶ崎市PTA連絡協議会の代表）</li> <li>・ 吉野 利彦（茅ヶ崎市小学校長会の代表）</li> <li>・ 森井 康匡（茅ヶ崎市中学校長会の代表）</li> </ul> <p><b>【事務局】</b> 青柳教育指導担当部長、力石学校教育指導課長、牧野主幹、岡田主幹</p>
会議資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 次第</li> <li>・ 「心のコップアンケート」の結果について <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">資料1</span></li> <li>・ 第4期答申書（素案） <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">資料2</span></li> </ul>
会議の公開・非公開	公開
非公開の理由	
傍聴者数	0名

次のとおり会議が行われた。

## 1 開会

## 2 協議等（司会進行は会長）

（1）「いじめ防止サミット」の結果について

### 【事務局より報告】

- ・「いじめ防止サミット」は、昨年度同様に児童・生徒が各学校で参加できるオンラインによる開催とした。当日は、市立全小・中学校の小学校4年生から中学校3年生まで、合わせて約150人の参加があった。当課担当指導主事による「心のコップ」の授業を実施し、参加した児童・生徒は、他校の児童・生徒とグループを組み、テーマに沿ってグループ協議を行い、テーマに係る自身の考えを述べたり、互いの考えを交流したりと、それぞれが考えを深めるよい機会となった。また、参加した児童・生徒が9月以降、自校において、今回実施した「心のコップ」の授業を題材に、いじめ防止に向けた取組を行ったと報告を受けている。

### (2) 「心のコップ」アンケートの試行結果について

#### 【事務局より報告】

- ・前回の調査会で御用命いただいた、「心のコップ」アンケートの試行について、令和4年9月から11月の間に、市内小・中学校4校を対象に実施した。
- ・各学校、週に1回、計8回の「心のコップ」アンケートを実施し、試行したクラスの児童・生徒及び、学級担任に、アンケート試行後に、振り返りのアンケートを実施した。
- ・「心のコップ」アンケートの実施については、昨年度のいじめ認知件数を参考に試行する学校を選定した。子どもたちのアンケート結果に学校毎の大きな差は見られなかった。
- ・振り返りアンケートの児童・生徒の回答では、「アンケートを実施してよかったため、続けた方がよい・続けてもよい」と肯定的に回答した児童・生徒が91.4%いた。自分の気持ちを発信しづらかったり、アンケートを通じて自分の気持ちを見直せたりした児童・生徒が今回のアンケートの意義を感じているようだ。一方、そういった意義を感じられない児童・生徒8.60%の中では、面倒さから続けてほしくないとの不満が出ていることが窺える。逆に自身の内面を振り返りたくない児童・生徒から「アンケートが辛かった」という意見も出ている。
- ・振り返りアンケートの教職員の回答を見ると、「負担に見合った意義を見い出せていない」という声が出ている。もっとも、この意見は、今回の児童・生徒の意見を知ることで受け止めが変わるかもしれない。
- ・いずれにせよ、今後アンケートを実施する際は、その作業や心理的負担感の軽減、何より、アンケートを行う意義についてしっかりと周知徹底していくことが重要と思われる。
- ・なお、この点について今期で判断・決定することは、スケジュール的にも困難と思われるため、資料2のとおり、この点は次期の調査会に引き継ぐという形がよいのではないかと考える。

### 質疑応答

#### 【委員】

- ・本来、アンケート調査はネガティブな意見が出るものだと思っていた。ネガティブな意見が出る中

で効果を見極め、やるか、やらないかを判断する必要があると思っていたが、結果を見ると肯定的な意見が多いことに驚いた。

- ・「自分と向き合えた」などの肯定的な意見が出ているが、アンケートをする前に何か工夫をしたのか。また、どういう状況でアンケートを実施したのか。

#### 【事務局】

- ・アンケート実施時の状況については、当該校の校長が出席しているので、後ほど子どもたちの様子を伺いたい。
- ・8月中に事務局の担当が、当該校へ行き、先生方を対象に説明会を開いた。その際、学級担任へ、子どもたちにアンケートの趣旨が十分に伝わるようなガイダンスを行った。各学校の先生方が、2か月間、1週間に1回のアンケートを丁寧に実施し、対応したと思われる。

#### 【委員】

- ・本校でアンケートを実施したが、事務局の説明のとおり、教職員にガイダンスを行ったことは非常に効果的であったと思う。そのうえで、同じようなスタンスで学級担任から子どもたちに「心のコップ」の授業を行ったことから、子どもたちなりにアンケートの趣旨や意義を捉えることができたため、非常によいアンケートになったと考えた。アンケートそのものも、短時間でオンラインでできることから、全体的に子どもの負担感は少なかったように思う。ただし、一人一人の子どもの声を聞くと、心理的な負担感を抱いている子どもたちが少なからずいることは見落としてはいけない。アンケートの細かい実施方法については検討する必要があるが、アンケートをやる意味はとて大きいと感じている。

#### 【会長】

- ・資料1について、事務局より説明をお願いします。

#### 【事務局】

- ・資料1は、「心のコップアンケートを終えて」のアンケートで寄せられた子どもたちのコメントに対して、調査会のこれまでの議論の経過を踏まえて事務局で作成した回答の素案である。
- ・資料1の掲示用・配付用の素案に対する加除修正がないか、御審議いただきたい。

#### 【会長】

- ・資料1の内容の加除修正について、御意見ををお願いします。

#### 協議等

##### 【委員】

- ・表紙の日付に誤りがあるので訂正を。

##### 【事務局】

- ・2022年を2023年に修正する。

**【会長】**

- ・タブレットの使用はどうだったか。

**【事務局】**

- ・今回のアンケートはタブレットを使用し、個々で答える形であったことから、児童・生徒が一斉に1分程度で答えることができたことは有効であったと考える。一方、児童・生徒の事後アンケートの回答から、アンケートに答えるために、わざわざタブレットを準備して立ち上げることや、QRコードを読み取ることなどが面倒だと感じた児童・生徒がいることが窺える。

**【会長】**

- ・教職員が子どもたちの答えを見逃してしまったことがなかったかという心配がある。

**【委員】**

- ・丁寧な取組はとてもよいが、毎回、先生が一言声をかけるなどの工夫があるともっとよかったのではないか。また、学校の給食時間は短く、子どもたちにとってはゆっくりと過ごしたい時間でもあるため、アンケートの実施は避けた方がよかったのではと思う。
- ・子どもたちが自分自身に向き合ってみるということは、非常によい機会であったと思う。また、ネガティブな回答をした少数の子どもたちをどう拾うかについて教職員が考えていけたらもっとよくなるのではないか。

**【事務局】**

- ・教職員にガイダンスを実施した際、「たくさん子どもたちが先生と話したい」と回答した場合、どこまで対応できるかという心配の声があった。事務局としては、「とにかくその声を拾う」ことが大変重要であるので、「先生と話したい」とチェックした子どもには必ず声をかけていくようお願いをした。

**【委員】**

- ・タブレットを出すのが面倒だという意見があったが、1日の中のタブレットを使用した授業の終わりにアンケートをやるのもよかったのではないか。
- ・アンケートには「先生に話したいことがありますか」という質問があるが、学級担任を快く思っていない児童・生徒にとっては答えることは難しいのではないか。先生ではなく、「大人や先輩に話したいことがありますか」など、間口を広げていくのも一つの手だと思う。「心のコップ」が一杯になった子どもが追い詰められた状況にならないようにすることも大事である。

**【委員】**

- ・このアンケートをやっていないから見過ごしていたかもしれない、やったから気付くことができたことのエピソードがあれば、そうしたことの記載があってもよいと思う。

**【委員】**

- ・「このアンケートをやると苦しくなる」というのは一つのサインだと思う。学校では年何回か教育相談を行ったり、年に3～4回、日常生活のことを聞いた具体的なアンケートも行ったりしている。中

学校では毎日の授業の中でタブレットを使用しているため、子どもたちの負担感も少なく、年間を通じて頻繁にアンケートを実施すれば、これまで拾うことのできなかつた子どもの声を聴く機会が増えると思う。

- ・アンケートをやることはとても有効であると感じる。教職員が子どもたちの状況をつかむことや子ども自身も自分のことを考え直す機会を得ることにつながるものである。

**【委員】**

- ・先ほどのエピソードについてももう少し聞かせて欲しい。

**【委員】**

- ・「意味が分からない」と答えている子どもたちに対して、また、負担と感じた教職員に対して、エピソードを通してアンケートの有用性を示すことによって、負担感を軽減することができるとよいと考えた。

**【委員】**

- ・子どもたちが、アンケートを自身のSOSの発信できるツールとして認識できるようになるとよい。そのためには、年1度程度、教職員がアンケートの意義を子どもたちに説明するとよい。
- ・アンケートの行い方を今後考えていく必要がある。慣れてしまうといい加減な回答になることがあるので、頻繁に行う必要はないのではないかと。自分がSOSを出したいとき、困っているときには書くのもよいのではないかと。自分がやりたいときに、友だちに見られないようにする環境を作ってはどうか。保健室などでもよいのではないかと。「困った時のタブレット」という感覚を子どもたちが持つるとよい。
- ・全てを担当が対応するとなると大変になりそうだと。担任は一番身近で子どもの様子を見ているが、子どもは担任に一面しか見せないこともある。本当は悩んでいるとき、窓口が担任のみだと伝えられないこともあるため、担任以外の目を入れてみてはどうか。

**【委員】**

- ・いつでも助けを求められるということを考えるならば、授業中に立ち上げても他の人に分からないようなアプリを作ってみてはどうか。
- ・定期的にやることは、自分が今ここにいるといった振り返りであるマインドフルネスの面で、いずれ大人になった時に役に立つ力になるので否定しない。
- ・緊急性のある場合や自分の話したいタイミングで話せるよう、簡単にできるアプリとして考えてみてはどうか。

**【委員】**

- ・頻度の問題は難しい。獲得目標によって頻度が変わっていくのであろう。
- ・緊急性のあるところで簡単にできることも大変重要である。定期的に観測していくことにも意味があると考えられる。ある意味、強制的に向き合う機会が設けられること、また、子どももその時の気持ちを「本当は辛いのに辛くない」と答えてしまうこともあるため、アンケートの方法は検討していくべき

だ。

- ・さらに、「アンケートに何も書かれなかったからクラスには何もない」のように、結果について過信しすぎないことが大事である。子どもの状況を確認する一つのツールとして位置付けるようにしてはどうか。
- ・慣れを防ぐには、毎回の先生の示唆を新しくしていくなどの工夫をお願いしたい。
- ・負担感については、今まで向き合っていなかったことに対して急に向き合うことになったことから、そのように感じた子どももいたのではないかと。但し、継続していくことによって落ち着いていくだろう。

#### 【会長】

- ・一つの調査ですべてを網羅することは不可能である。趣旨をもう一度確認したい。

#### 【事務局】

- ・事務局としては、コメントにあるように、アンケートを続けていくことでSOSを発信できたことより、自分の気持ちを整理できたということに重きを置いていた。一部の子どもがそれを感じ取ってくれたことは、周囲の先生の働きかけや本人の素直な気持ちから生まれたものであろう。
- ・一方、データを管理していくと、SOSのキャッチをするのはとても大変であることが分かった。週毎に増えていく大量のデータを担任の先生が読み取ることや、匿名の内容に対応することは大変である。このアンケートを、SOSをキャッチする機会として捉えすぎてしまうと、目を通すだけでも大変である。また、年間のデータ数は膨大になるためサーバを圧迫してしまうことがオンライン上の欠点である。質問を減らすなどの工夫やSOSにどう対応するかについては、来年度以降きちんと調整をしなければならない。

#### 【委員】

- ・「心のコップ」の授業はとてもよいと感じた。6年生が参加した「いじめ防止サミット」でも「心のコップ」の授業について紹介していただいたり、アンケートを行う前に当該の4学年職員に説明していただいたりしたことで、5年生の職員から、この授業をやりたいという意見や実施した学級があった。本校では実施していないが、この「心のコップ」は1年生でもイメージしやすく、非常に汎用性があるので、いろいろな学年で使えると思う。

#### 【委員】

- ・最初にアンケートの案を見たとき、こんな単純なもので子どもたちの気持ちが推し量れるか疑問であったが、逆に単純であったからこそよかったように思える。どれくらい心に留めるかは、本人の気質によるが、担任の言葉掛けもよくて、そのような気質を引き出すことができたようだ。これからも、先生方のちょっとした言葉掛けが必要なのではないかと。
- ・頻度の問題とSOSをアンケートで拾うという考えについては今後の検討課題であろう。私はSOSをアンケートで全部把握することは難しいと考える。相談したいという気持ちを把握する程度のものでよいのではないかと。誰がどう聞くかについても工夫していかなければならない。

**【委員】**

- ・アンケートの中で「お互いの気持ちが分かりあえた」と書かれていることに疑問を感じた。きっとアンケートをやる際に担任がいろいろ話をしたからであろう。「自分がよくない」とか、「相手の気持ちを考えるようになった」など、アンケートによる効果なのか担任等の関わりによるものなのか、分かりにくい。

**【事務局】**

- ・おそらく子どもたちは、「心のコップ」の授業を受けたことで、自分の心と向き合うことと同時に、人の心にも思いをはせることができたのではないか。アンケートというよりは、授業を受けたことによって生まれた言葉であろうと考える。また、アンケートを行う都度、担任の先生がアンケートの趣旨を話したこと、自分が答えると同時に隣の子も答えていたことにより、「自分に心があることと同じように友だちにも心があるのだ」ということを十分に投げることができたことが窺える。

**【委員】**

- ・まさにその通りで、「心のコップ」の授業を行っていく中で、考えを共有する場面は結構ある。「そんな風に考えているんだ」「なるほどね」などの交流があるので、このような声が上がったのだろう。3項目のアンケートだけでなく、子どもの発達段階に応じた「心のコップ」の授業を丁寧に行うことが重要である。

**【委員】**

- ・アンケートは最終的に個人に返っていくものだが、この授業を行うことで、道徳的にかなり耕されたのではないか。中学生にとっても「心のコップ」が分かりやすく、自分のことだけでなく、相手のことを思う気持ちやいろいろな気持ちが出てくること、自分の意見を伝えられたことなどの効果が生まれてきたようだ。これがいじめを防止することにつながっていくのではないか。

**【委員】**

- ・配付用は子どもたちに配られ、保護者も目にすると思うので、学校から、心のコップの授業をした上でアンケートを行ったことを明示するとよい。そのことで、保護者に安心感が生まれるのではないか。このままだと先生方が授業を行ったり趣旨を説明したりしたことが子どもたちに浸透して効果が出たことが保護者に伝わらない可能性がある。

**【事務局】**

- ・貴重な意見ありがとうございます。資料1に説明書きを加えて配付していきたい。
- ・これまで協議していただいた意見を基に、アンケートのやり方・頻度や目的などを次期の調査会に引き継ぐ。

**【委員】**

- ・アンケートを相手に返す時に、アンケートをする前のアプローチによって生まれた効果と、アンケートそのものを分けた方がよい。

**【会長】**

- ・アンケートの結果で出た個別の意見に対してどう対応したのか。

【事務局】

- ・個別のコメントに対してはアプローチしていない。すべて匿名で書かれているので特定ができない状況である。

【会長】

- ・「思い出したくない」「続けてほしくない」と答えた子どもたちに対するアクションをしなければならないのではないか。また、学校の先生の中にも同様なネガティブな回答がある。先生の対応は子どもたちに大きな影響を及ぼすため、こういった先生にも注視しなければならない。

【委員】

- ・「なぜこんなことをやっているのか」という意見がある。これに対しては、「自分がどうなのか」といった単純な提示のほうがよいのではないか。授業とアンケートを分けて説明していけばよい。また、緊急性の高い子どもたちに対しては、こうしていきたいといった方針も書いたらよい。目的の再提示など、発達段階に応じた回答が必要なのではないか。

【委員】

- ・子どもの「心の負担」に対して何もアプローチしていないことは残念だ。アンケートに答え、話すところが見つかり、うまく改善できたという実績が一つでも書かれていれば、「心のコップ」が一杯なのに「よかった」と偽った答えた子も、自分が素直に書くことで解決していくのではと考え、次回は素直に書くことが望めるのではないか。偽って答えた子は、あまり期待をしていないのではないか。「もっと大人を期待していいんだよ」ということを示すためにも、今回の結果からこんな対応をして逃げ場があるといった事例が必要だ。

(3) 第4期答申書について

【事務局】

- ・資料2の通り、今期の答申書案を事務局で準備した。
- ・一般的な体裁に関する部分とは別に、先ほどの「いじめ防止サミット」、「心のコップ」について暫定的な内容、また前回会長が担当されることとなった、アサーションに関する提言案が盛り込まれている。
- ・こちらの内容をたたき台に、加除修正の必要性について、御協議いただきたい。
- ・事務局から1点修正をする。2ページ、本日の第4回会議の曜日が間違っていた。水曜日に訂正をしてほしい。

【会長】

- ・事務局からの説明について、質問・意見はあるか。

協議等

#### 【委員】

- ・表記の面で、目次、3、提言（1）アサーショントレーニングの…のページが間違っている。
- ・「アサーション」か「アサーショントレーニング」か、統一した方がよい。
- ・1ページ「はじめに」1行目に「以下本会」「以下市教委」とある。2ページ以降もこの言葉を使うべき。
- ・2ページの（1）（2）が今日の次第と一致していない。
- ・3ページ（2）ア 試験実施は試験的实施ではないか。
- ・4ページ イ 「取り組み」を「取組」に合わせる。
- ・5ページ 「学級作り」のように「雰囲気づくり」の「つくり」の統一性
- ・6ページ 7行目 「教職員程」を「教職員ほど」  
しかし…「火事が起きた場合の対応を考えない」の表現の仕方  
（1）の最後 「いじめ予防教育」を「いじめ防止対策」に
- ・7ページ （3）「報告をうけて」を「報告を受けて」に

#### 【事務局】

- ・指摘していただいたところを修正する。「アサーション」で統一するが、5ページ4行目の授業については「アサーショントレーニング」のままにしたい。次第内容は本日の次第に合わせる。「本会」「市教委」は2ページ以降も適用する。「作り」はひらがな表記「づくり」で統一する。「火事…」の部分は整理して再提示する。

#### 【委員】

- ・アサーションという言葉はどれだけ一般に浸透しているのか。一般の人に分かりにくいので、5ページ 3 提言（1）のタイトルをわかりやすい言葉に変更した方がよい。

#### 【会長】

- ・再検討した文章に差し替える。

#### 【委員】

- ・「『もしいじめが起きたらどうするか』のシミュレーションは短時間で可能であり」と書かれている部分を読むと、印象として「ちょっとやることでいろいろ変わるので、ちょっとだけやってみませんか」と受け取れる。「重要なので、しっかり取り組みましょう」という風に変えられないか。
- ・自治体の中ではいじめ防止教育に前向きに取り組めていないところもある。「世界のいじめ予防の取組と比較した場合、日本の教育現場は、教職員を対象にしたいじめに関する研修が充実している」とある部分を少し修正してはどうか。

#### 【会長】

- ・教職員の研修については、概念的・一般的な研修が充実しているが、児童・生徒に対するいじめ防止に関する授業、及びその授業を生かした具体的・発展的な指導の研修は不十分である。また、いじめ防止対策調査会の中でもいじめ調査をしていくスピードが遅いことが課題である。関係職員が

集まらない、臨床心理士やスクールカウンセラーがいないといった所もある。こういった点を踏まえて書き直すとよいのではないか。

**【委員】**

- ・提言の最初は「子ども達が自身の心の状態を知る試み」に触れ、二つ目に「いじめを受けた子が声を上げる試み」を書くべきではないか。

**【会長】**

- ・提言するからにはやっていかなければならない。茅ヶ崎市の先生方はやってくださっているので、少し抑えた書き方をした。

**【事務局】**

- ・本調査会の提言として、再度修正したものを委員の皆様は1月中に示し、意見をいただいた上で、2月下旬には答申書を決定、3月に出すようにしたい。

**【委員】**

- ・提言の中に「心のコップ」の意味を掲載した方がよい。

**【事務局】**

- ・加えていく。

**【委員】**

- ・先ほど提言の二つ目の所で、「自分の声を上げる試み」とあったが、その前に「子供がいじめにあったときにどうすべきか」の方がよいのではないか。

**【事務局】**

- ・提言の(1)に「自身の心の状態を知る重要性について」、(2)に「心の守り方を知る重要性について」と考えてみた。これで再構成してみたい。

**【委員】**

- ・エスカレートさせないことについても言及するとよい。

### 3 事務連絡

**【事務局】**

- ・令和4年度第2回茅ヶ崎市いじめ防止対策調査会の協議等を終了する。
- ・今後の予定として、答申案など修正したものを1月中に郵送する。2月中に検討し、最終的に3月に答申書を出す。
- ・本日の調査研究内容については、「茅ヶ崎市いじめ問題対策連絡協議会」の所管課であるこども育成相談課に情報提供する。
- ・本調査会委員の任期は、令和3年度から2年間となるため、皆様の任期は今年度末で満了となる。

4 閉会挨拶

会長署名 柳生 和男

委員署名 小島 秀一